

エクスプリマチュアチャイルドの長期予後

東邦大学大森病院周産期センター 藤井 と し

〔研究目的〕

新生児医療の進歩に伴い、低出生体重児の死亡率は減少し、出生体重 1,000g 未満の超未熟児が生存しうようになった。ところが超未熟児に障害児が多く、たとえ重度な障害がなくとも微細脳損傷が多いと考えられている。都立築地産院新生児 ICU (未熟児室) に入院した低出生体重児を follow up し、出生体重別に救命率および障害例を調査し、MBD と診断された児の症例について検討した。

〔研究の対象と方法〕

都立築地産院 NICU (未熟児室) に昭和42年～54年の間に入院した低出生体重児 1,668 人について、出生体重別に 1,000g 未満、1,000～1,499g、1,500～1,999g、2,000～2,499g の 4 群に分け、さらに昭和42年～48年の 7 年間と 49年～54年の 6 年間の前期・後期に分け、救命率、長期予後について調査を行った。

発達テストは 2 才児は津守・稲毛式テストを行った。知能テストは 3 才から 5 才までは田中・ビネーのテストを、6 才以後は WISC テストを施行した。

MBD の検査は soft neurological sign の検査は Towuen & Prechtl の微細神経障害の検査、Garfield の motor impersistence test を行い、認知については Bonder Gestalt test を行った。判定はこれらの検査で異常が 2 検査以上に陽性にでた場合を異常とした。

〔研究結果〕

I) 出生体重別に前期・後期に分け救命率を調査し(表 1) 長期予後については、脳性麻痺 (CP とする) 精薄 (MD とする)、MBD、てんかん、RLF (高度の視力障害) の発生をしらべ、MBD の症例の検討を行った。先天奇形によるものは除いてある (表 2)。

a) 出生体重 1,000g 未満の症例

1,000g 未満の生存率は前期が 28.6%、後期が 39.6% であった。生存例は全例 follow-up を行っている。

CP は前期は 0、後期に 1 例であった。この症例は重症仮死、RDS、頭蓋内出血 (脳室内出血) のあった症例である。

MD は前期は 0、後期に 1 例で、本例は、在胎 25 週 6 日、出生体重 860g、新生児期は、RDS、退院後感染を繰返した症例である。

他の 25 例は良好に発育し、MBD は 1 例もみられなかった。

b) 出生体重 1,000～1,499g の症例

救命率は前期は 66.7%、後期は 81.0% であった。follow-up は 137 例中 127 例 93.7% に行った。

CP は前期に 2 例、後期 3 例であった。前期の 2 例は RDS、1 例は原因と思われる合併症はなかった。

MBD は前期に 2 例、1 例は在胎 33 週 1 日、出生体重 1,140g の SFD 児、母親は重症妊娠中毒症があった。

新生児期の合併症は低血糖症 (血糖値が 2.5mg/dl、5.5mg/dl) があった。他の 1 例は在胎 30 週、出生体重 1,485g、Apgar 8 点、骨盤位分娩、双胎の II 児、新生児期には合併症はなかった。第 1 児は出生体重 1,580g であったが、神経学的異常はみられなかった。

他の 3 人は MD と MD+RLF である。

表 1 低出生体重児の救命率

出生体重 (g)		例数	生存例	救命率
999～	前	28	8	28.6%
	後	48	19	39.6%
	計	76	27	35.5%
1,499～1,000	前	87	58	66.7%
	後	100	81	81.0%
	計	187	139	74.3%
1,999～1,500	前	181	163	90.0%
	後	191	186	97.3%
	計	372	349	93.8%
2,499～2,000	前	700	689	98.4%
	後	433	421	97.2%
	計	1,133	1,110	98.0%

前期 1967～1973年

後期 1974～1979年

表 2 エクスプリマチュアチャイルドの長期予後

出生体重(g)		follow-up 例	CP	MD	MBD	Epilepsy	RLF
999~	前 後	8	0	0	0	0	0
	期 期	19	1	1	0	0	1
	計	27	1	1	0	0	1
1,499~1,000	前 後	51	2	2	2	0	0
	期 期	76	2	2	0	0	0
	計	127	4	4	2	0	0
1,999~1,500	前 後	125	2	4	1	0	0
	期 期	141	1	1	0	0	0
	計	266	3	5	1	0	0
2,499~2,000	前 後	496	2	1	1	2	0
	期 期	369	0	2	0	0	0
	計	865	2	3	1	2	0

前期 1967~1973年

後期 1974~1979年

RLF 視力障害のある例

後期は MD が 4 例, MBD は 5 才未満のため検査を行っていない。

c) 出生体重 1,500~1,999g の症例

救命率は前期が90.0%, 後期は97.3%と, 死亡率は非常に改善されている。follow-up は前期125例, 後期は141例に行えた。

CP は前期 2 例, 後期 1 例であった。

MBD は前期に 1 例みられた。この症例は在胎35週, 出生体重 1,600g の SFD 児, 母親は重症妊娠中毒症, 児は新生児期に低血糖症があった。

前期他の 3 例と後期の 1 例は MD であった。うち 1 例は言語障害の著明な精薄で, 4 才で事故にて死亡した。

d) 2,000~2,499g の症例

救命率は前期98.4%, 後期が97.2%, follow-up は前期 496 例, 後期 364 例が行えている。

CP は前期 2 例, 後期は 0 であった。

MBD は 1 例であり, 症例は在胎 42 週, 出生体重 2,429g の SFD 児, 新生児期に合併症はなかった。6 才 7 ヶ月 IQ 93, MBD の検査で soft neurological sign と Bender Geshtalt の test で陽性であった。

他の症例は 1 例が MD, 1 例はてんかん, 1 例はてんかんと言語障害があった。

後期の 2 例は MD の症例であった。

II) MBD 例について

MBD の検査は 5 才以上の症例について行っているので, 1967~1973年の前期の症例に 4 例みられた。4 例のうち 2 例は, 母親に妊娠中毒症があり, 児は SFD 児で,

新生児低血糖をおこした症例である。2 例とも血糖値は 10mg/dl 以下となったが, しんせん, 易刺激性程度の症状で, 無呼吸, けいれんなどの症状はみられなかった。第 3 例は双胎の II 児で骨盤位分娩であったが, 新生児期には著明な合併症はなかった。第 4 例は在胎42週の低出生体重児 SFD 児であった以外は新生児期の合併症はなかった。

〔まとめ〕

都立築地病院で出生, 入院した低出生体重児について, 出生体重別に, 1967~1973年の前期と1974~1979年の後期に分け, 救命率と長期予後を調査, MBD の症例について検討した。

1) 救命率は 1,000g 未満の児は前期は28.6%, 後期は 39.6% と低いが, 1,000g 以上は, 前期に比し後期は改善され, 1,000~1499g で 81% 1,500g 以上では97% であった。

2) CP は体重の小さい群に多いという結果ではなく, 1,000g 未満には 1 例, 1,000~1,499g に 4 例, 体重の大きい 2,000g 以上に 2 例みられた。

3) MBD は 1,000g 未満には 0, 1,000~1,499g の群に 2 例, 1,500g 以上の群には 1 例づつで計 4 例であった。4 例中 2 例は母親が重症妊娠中毒症, SFD 児, 新生児低血糖症例であった。

4) MD は各体重群にみられ, てんかんは, 体重の大きい群に 2 例みられ, RLF による高度の視力障害は 1,000g 未満に 1 例であった。今後低出生体重児と MBD の関係を検討する予定である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔研究目的〕

新生児医療の進歩に伴い、低出生体重児の死亡率は減少し、出生体重 1,000g 未満の超未熟児が生存しうるようになった。ところが超未熟児に障害児が多く、たとえ重度な障害がなくとも微細脳損傷が多いと考えられている。都立築地産院新生児 1CU(未熟児室)に入院した低出生体重児を follow up し、出生体重別に救命率および障害例を調査し、MBD と診断された児の症例について検討した。